

## 「クリエイターの話 ～ 私のイメージの源泉」

スペースデザイン部会員 谷 浩二

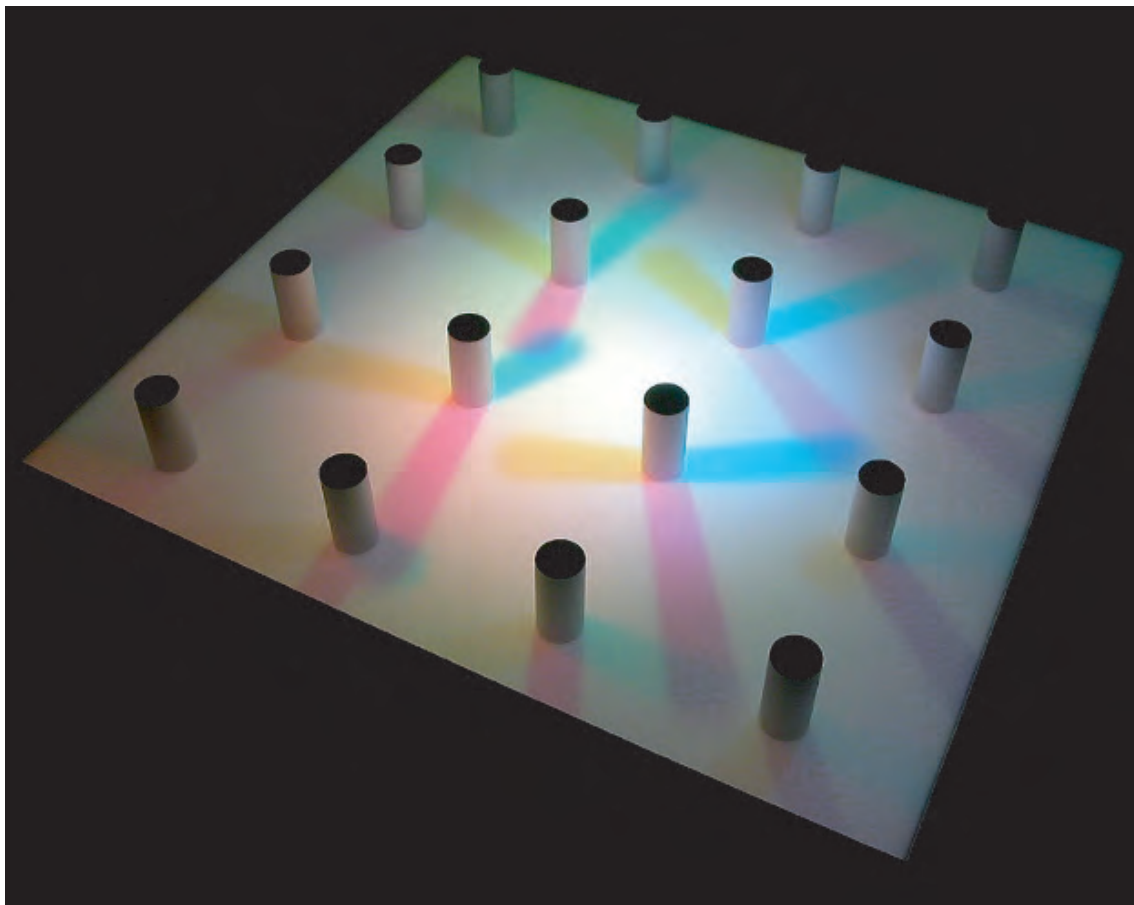
### 『光の不思議』

大学では実材に触れていたくてクラフトの金工を専攻しました。課題は鍛金や鍍金での制作で、磨けば光る金属の反射が心地良かったのですが、なぜかその頃から「見える」ことを不思議に思い、「光」に興味が湧いていました。やがてどんな課題でもこじつけて照明がらみの作品を作るようになり、その結果就職先は照明器具メーカーに。勤務地は秋葉原ですが今と違ってサブカルチャーは皆無、殆どのお店がデンキ屋さんやデンザイ屋さんだったので、どこに入っても興味深く楽しかったです。光源の主流は電球と蛍光灯ですが、それでも種類が多くて全部は買えず、点灯見本を眺めては光の場を想像していました。そして「光源」は「物体」だが、そこから生まれる「光」は物ではなく発光という「現象」であり視覚を発生させる「出来事」なのだ、と思うようになりました。また、当時は見るもの何でも、これが光ったらどうなるかなとか、あれを光らせるにはどうしたらいいかな、と考えながら歩いていました。

仕事は施設の照明計画や器具設計で、その場に求められる光の機能性を追及するのですが、展覧会に出品する作品では、光を受けることで現れる素材や場の反応を知りたかったです。なので「光のもつ表現力を生かすこと」「光源を直接見せないこと」以外に拘る条件はありません。とはいえ、現実の空間で光が物体に及ぼす所作をリアルタイムで見たいので、映像や動画、VDT等は使わず、超アナログな仕組み？に拘っています。従って、光を受けて独特な反応を示してくれる相性の良い素材に頼ったり、反射、透過、吸収、屈折、干渉、偏光、錯視、残像、陰影、混色、明暗、点滅、フェード、等々、光が関わる特徴的な現象でイメージ展開したり、を繰り返している訳です。

さて、古い作品ですが光と素材の関係や現象が伝わりやすいかなと思うものを選びました。これらは日本インダストリアルデザイナー協会（当時）主催の「あかりメッセージ」という照明デザイナーの展覧会に出品したもので、それぞれの寄稿文も載せておきます。但し、3点ともゆっくりと動いている作品なので、静止画像では十分に意図が伝わりませんが、源泉とまではいかなくとも構想のきっかけだけでも感じてもらえればと思います。

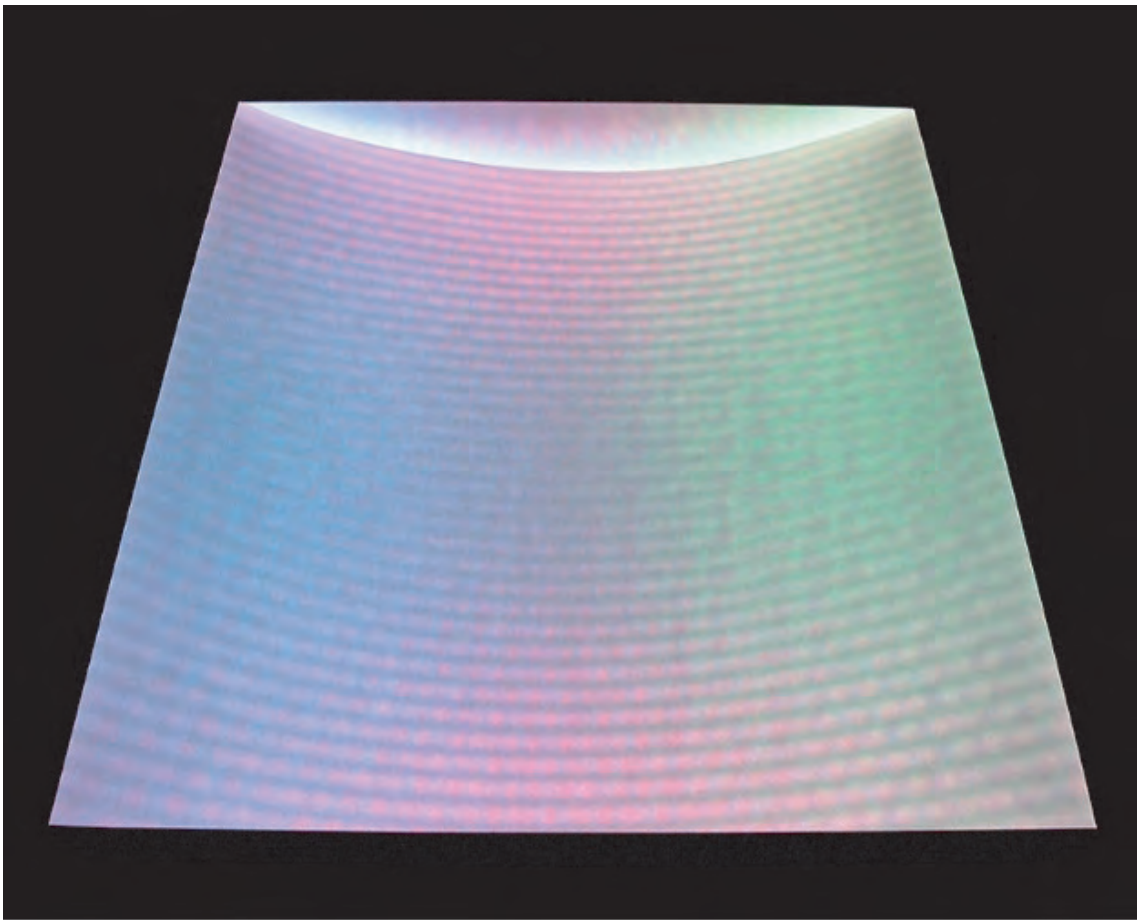
#### <作品1> あかりメッセージ 2002 の作品



《カゲさんのお蔭》 W45×D45×H45 MDF、アクリル、スチレン、JDR、ポリカラー、ACモ

物体の視覚化には光が必要だが、逆に光を認識するには物体の存在が欠かせない。お互い様である。しかしここで忘れてはならないのがカゲたちの役割とその仕事ぶりだ。影や陰や蔭や翳たちである。普段は謙虚で影を潜めてじっとしているが、いざとなれば人間の深層心理にまで大きな影響を及ぼす、なんとも不思議だがとても有難い存在でもある。もちろん陰で糸を引くのは光なのだが、彼らのその確固たる存在感は、メディアとして時間と空間を共存させる動きの役割にも似ている。素材として存在する要素と光という出来事とがカゲたちの媒介で出会い、お互いの立場を認め合った時、そこには視覚を物理化する単純な説明では納得できない新鮮な光景が現れることを思えば、カゲたちには人格をも感じさせられることがある。光の持つ表現力は想像をはるかに超える大きさだが、実はその影で、カゲたちが黙々と仕事をしているのである。お蔭様だと感謝しなければならない。1)

## <作品 2> あかりメッセージ 2003 の作品

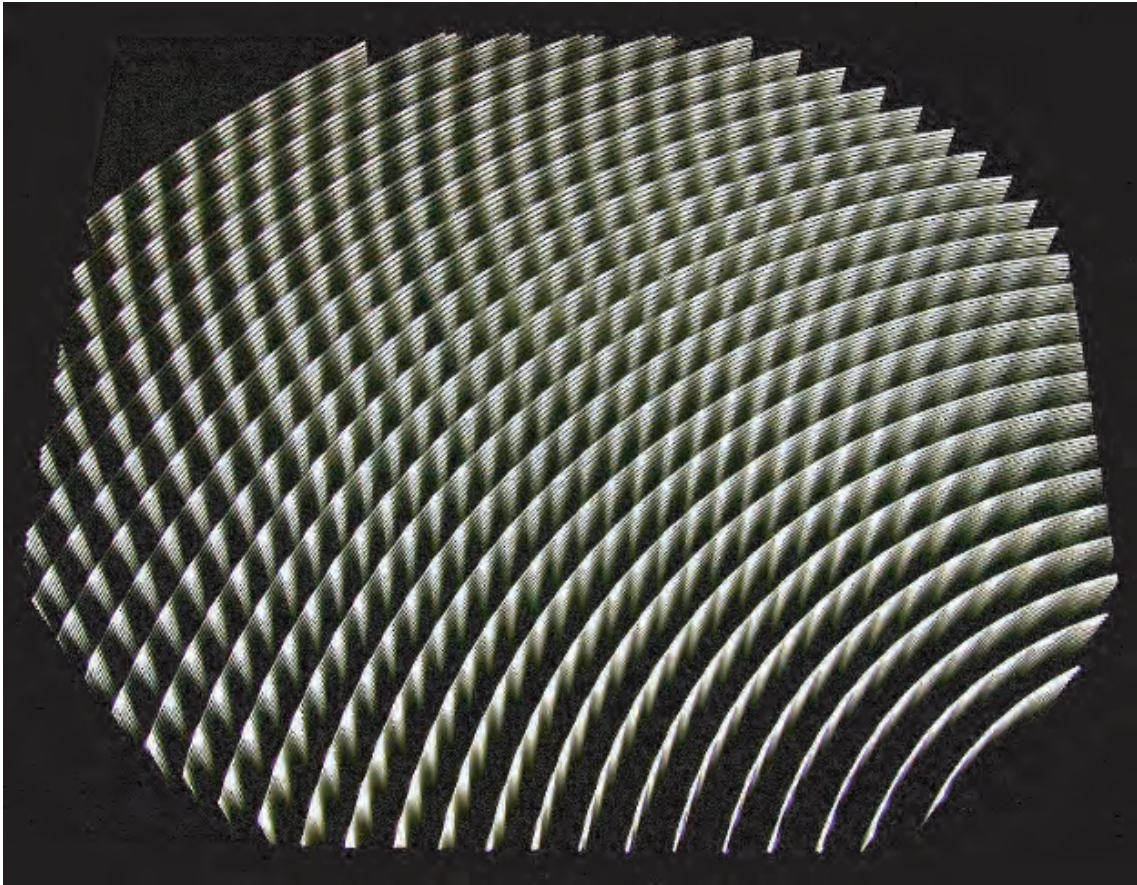


《波ちゃんありがとう》 W45×D45×H45 MDF、ファイバークラフト、パンチングメタル、LED、AC モーター

今さらではあるが、このところの新光源開発は目覚ましい。中でも光の波長成分そのものを制御するダイクロイック加工やLEDの色温度操作技術などは、人間の光に対する感受性を大きく変え、光の持つ表現力の新たな可能性を示したものとして注目を浴びている。自然光や一般電球などでは見られない色の変化を、分解された純粋な色の光として見せられると、いよいよ光の世界をも征服したのかとつくづく人間の偉大さを感じさせられる。ただ、いくら色の世界が協調されても自然光の持つ素朴さや崇高さなどからすれば、同じ土俵に上がれないのも事実であり、勘違いしてはいけないと言われていたような気にもなる。これから先、人工光源とうまく付き合っていくためには謙虚に使わなくてはならないのだろう。美しい虹やオーロラも毎日見ていたらきつと飽きる。崇められる光になるためには出し惜しみが必要なのかもしれない。それほど波の威力は大きいのである。2)



### <作品 3> あかりメッセージ 2004 の作品

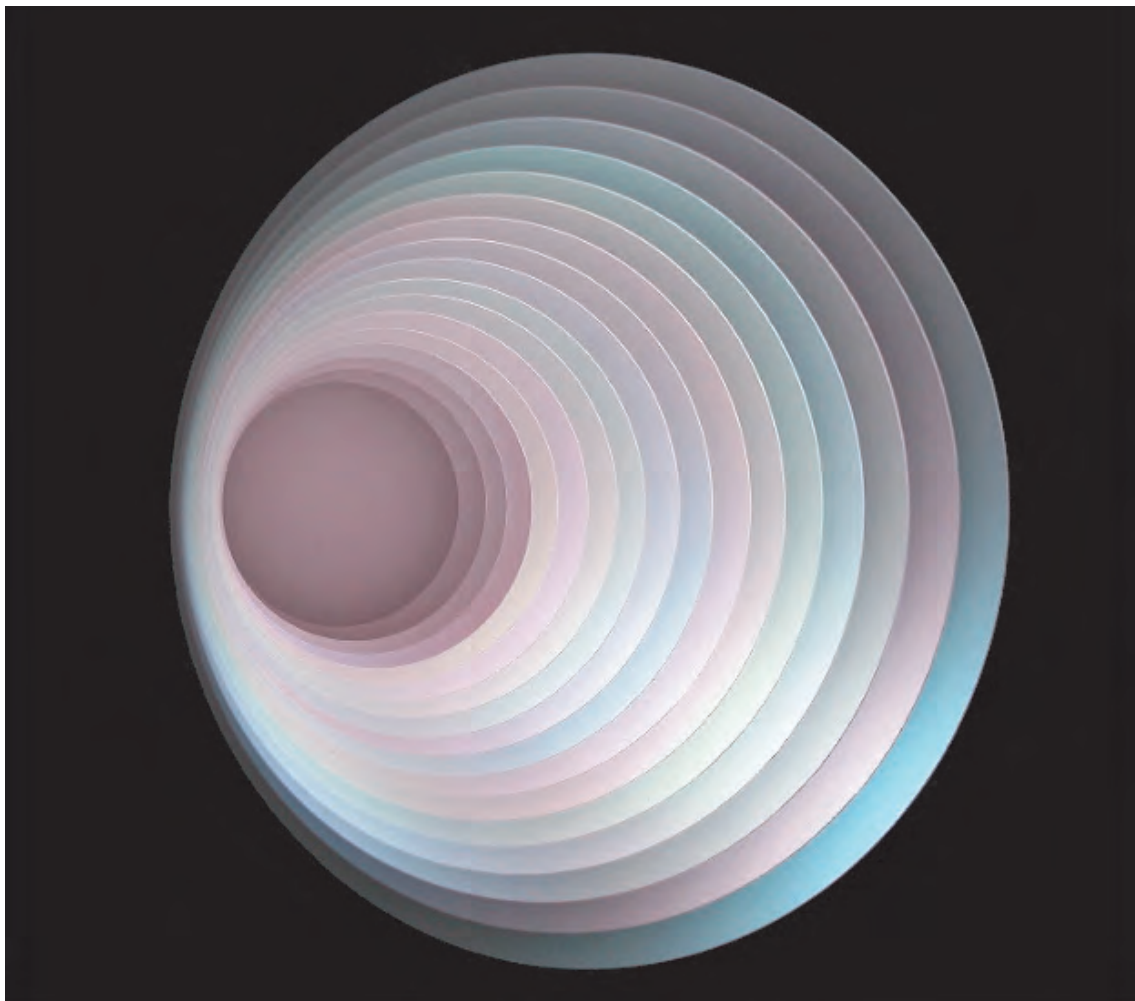


《カガミ?もち!》 W45×D45×H45 MDF、アクリル、EFD15EL、AC モーター

あかりや光するという出来事を考えるとき、どうしても「映る」とか「反射」という現象を無視することはできない。反射によって明るさや色を感知させてくれるのだから。この反射や映すという作用を最も身近で強く感じさせてくれる物体は鏡ではないか。この素材は太古の昔から変わらぬ仕事振りだが、実に存在感の薄い哀れな立場に置かれ続けている。なぜなら、日常で鏡を見るという行為は映された像を見るのであって鏡自体を物として見みているのではないから。けれどもその謙虚でしかも直向に媒介する性質はまさにメディアと呼ぶにふさわしく重宝されてきた。実はいつの時代でもニューメディアの最先端を走り続けてきた影の実力者なのだ。+( たす ) あかりというアクティブなあかりの関わり方を考えると、この控えめな鏡たちにも日の目を見せてやりたい気持ちになった。しかし鏡が自らを鏡に映せば自己主張はできるものの、今度はもっと過酷な無限反射という重労働に耐えなければならない。申し訳ないけれども今回はこれが天職だと諦めてもらうことにする。いずれは闇の中で永遠の休息が取れるのだから。3)

もう一つ同展に出した作品で錯視をテーマにしたものがあります。

<作品 4> あかりメッセージ 10 周年記念展の作品

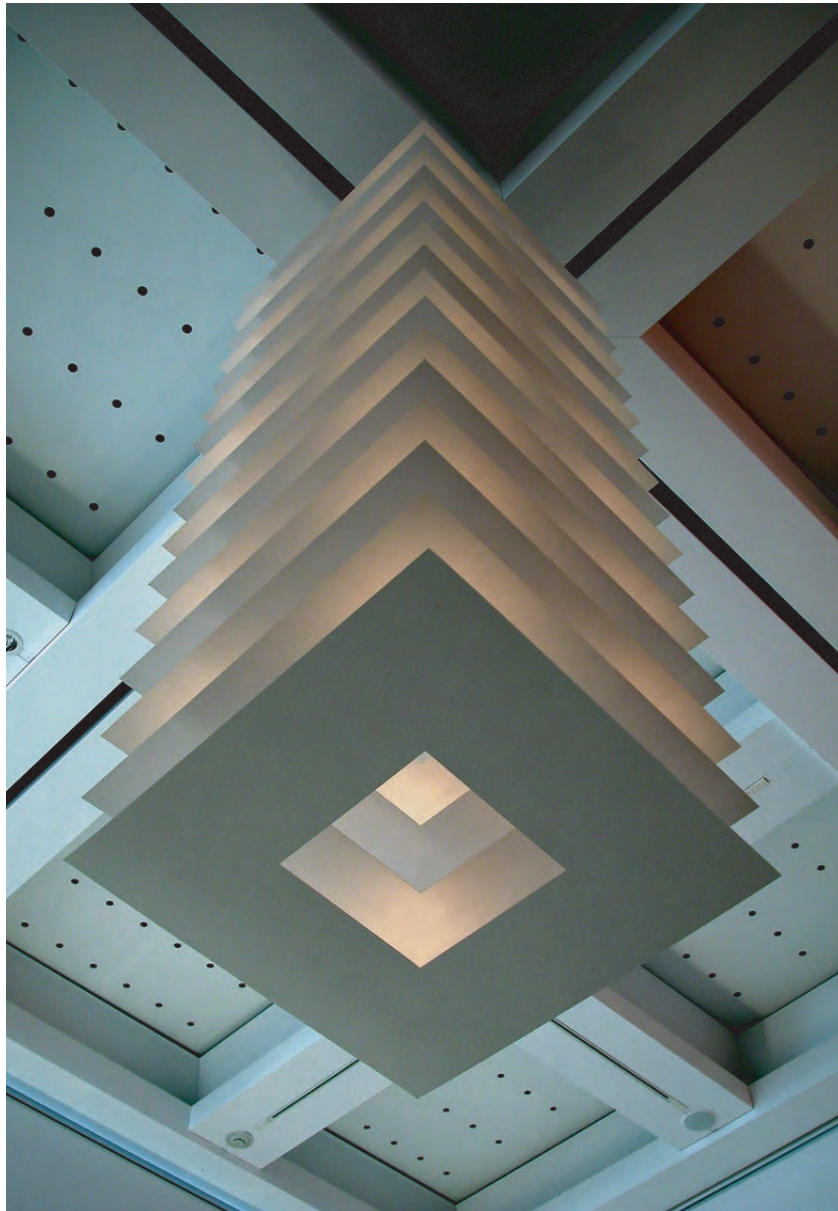


《Luminous Fault》 W45×D45×H45 MDF、ボール紙、iCOLOR COVE LT

これは光の色と明暗の変化で遠近感が変化する錯視を引き出すものですが、翌 2007 年に開館した国立新美術館での第 71 回新制作展で、天井から吊れることを知って試みた<作品 5>の基本構想に繋がったものです。



<作品 5> 第 71 回新制作展の作品 (2007 年)

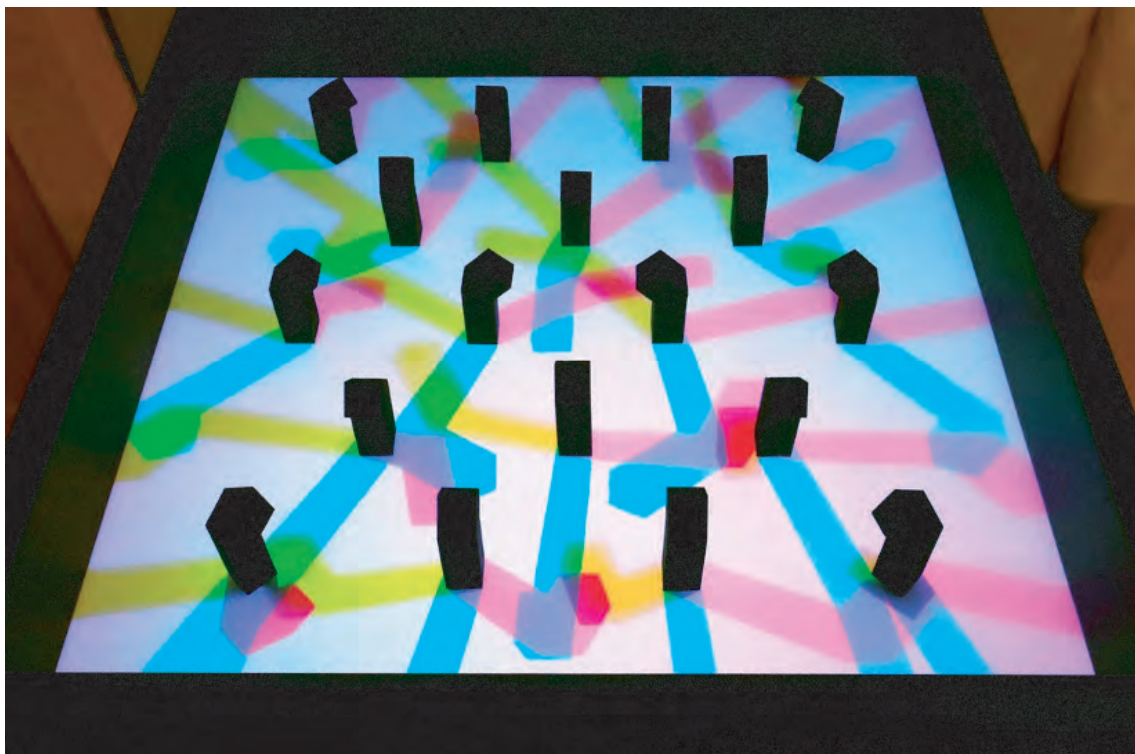


《Optical fault》 W73×D73×H245 ボール紙、ムギ球、電子トランス、自動調光器

中央に切り抜かれた正方形の穴が上に行くほど少しずつ小さくなっていて、真下から見上げると当然ながら実際の距離よりも遠くに感じられます。そこに光が与えられると明暗の作用で遠近感が波打つように変化して見える(はずの)作品でした。同化現象の立体版になればいいなと思っていたのですが、うす暗い展示場所とはいえ、まだまだ明るかったので、はっきり実現できなかったことでは、ほぼ失敗作なのです。

このように光による作用の具現化を試みてきましたが、やはり今でも「加法混色」が気になります。相変わらずだな、と言われそうですが、LEDの進化で表現の可能性も広がっていて、自分の中でのテーマは毎回少しずつ変化しているのです。

## <作品 6> 第 86 回新制作展の作品 (2023 年)



《カゲさんのご挨拶》 W59×D59×H82 MDF、アクリル、発泡ポリエチレン、パワー LED、AC モーター

この作品もゆっくり動いていて周期は90秒です。それぞれ3方向のカゲたちが伸び縮みしながら出会い、挨拶を交わす時、その話題と深さで色が変わるというのですが、会話については想像するしかありません。日陰のカゲも日向のカゲも互いに敬意をもって仲良くして欲しいです。

光との付き合いは50年近くになりますが、今でも不思議なことばかり。理屈では分かったつもりでも、感覚的にはピンと来ないし、思うような答えを返してもらったことは殆どありません。私を理系人間だと言う人もいますが、もしそうならこんなことで唸らずにもっと明解な作品を作れていると思いますね。インゴ・マウラーのユーモアやジェームズ・タレルのスケール感にも憧れを持っていますが、見ている角度が少し違うような気がします。

ということで、～私のイメージの源泉は・・・、「これ光ったらどうなる・・・？、光らせるにはどうする？・・・。」です。

### <引用文献>

- 1) 谷浩二『あかりメッセージ 2002』社団法人日本インダストリアルデザイナー協会 /JIDA 2003 年 p.23
- 2) 谷浩二『あかりメッセージ 2003』JIDA/ 社団法人日本インダストリアルデザイナー協会 2003 年 p.25
- 3) 谷浩二『あかりメッセージ 2004』JIDA/ 社団法人日本インダストリアルデザイナー協会 2004 年 p.15

## 谷 浩二 プロフィール

---



- 1952 大阪府生まれ
- 1977 武蔵野美術大学 工芸工業デザイン科卒業
- 1977 新制作展（'77 '78 新作家賞 '80 会員推挙）
- 1982 谷照明設計事務所
- 1986 照明士（Senior Lighting Consultant 1191）
- 2018 日本おもちゃ病院協会会員
- 2023 照明学会終身会員

### その他

日本国際美術展・現代日本美術展・エンバ賞美術展・  
UTOPIA FESTIVAL 等に出品、グループ展 24 回